熊野の森から

怪しの熊野

其の五十

「古座川町の怪異（其の一）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

古座川という地名は、実は少しヤヤコシイ。清流として名高い古座川は、中流から源流までが古座川町、河口付近は旧古座町（現在の串本町古座）を流れている。今回と次回にわたり、川の古座川ではなく古座川町の怪異を紹介する。

国立文書館がインターネット公開した『天保国絵図、紀伊国』（パブリックドメイン）。これをみると、古座川町全域が街道の途中の村であったことが分かる。

古座川町は奥深い山に囲まれているが、町内の全域、奥の奥にまで怪異の話が残されている。熊野の妖怪は人里の外周に棲むモノが多く、山深い場所にまで人々が暮らしていたことを示している。最奥の集落や集落跡でも、その昔は街道沿いであったりする。三尾川からは串本町の和深やすさみ町の佐本へ、平井や添野川からは日置川へ、松根からは旧熊野川町へ、小川や樫山からは那智勝浦町の色川へ、池野山からは串本町の佐部へと街道でつながっていた。古くから近代まで多くの鉱山があり、江戸時代には江戸の燃料の多くを賄っていたという歴史を持つ。そのせいか、山中の集落跡に驚くような御殿の跡があったりする。

添野川の若宮神社は「苔の神社」としても知られる。その苔むした雰囲気は，それだけで見る者を圧倒する。

その街道辺りには、まずは天狗の話が残されている。例えば、猿川には空を飛ぶ山伏姿の天狗の話が残されているが、上富田の岩田に空を飛ぶ山伏姿の「空神」の話があり、洞尾（うつお）の矢倉神社の祭神が「空神（そらがみ）」であり、それぞれの話は無関係かもしれないが、何らかの共通性があったとすると興味深い。その他では、毎月旧暦七日と二十八日の晩には天狗（てんぐ）の打ち鳴らす太鼓の音が十万岳の麓の村中に響き渡ったという話も残されている。

古座川町の山中には、ダルの話も数多く残されている。出没場所や生態は熊野の他地域のダルとほぼ同じで、取り憑（つ）かれると急激な倦怠感に襲われ、行き倒れてしまうこともある。回復するためには、何かを食べるか、手のひらに米という字を書いて飲み込むふりをすると良い、ということでも同じだ。ただ、添野川のダルの話は少し変わっていて「若宮神社跡にある上の水たまりの水を飲むとダリツキ、下で飲めば免れる」という聞き取り調査が報告されている。若宮神社「跡」とあるのは、若宮神社が西川の丸山神社に合祀（ごうし）されていた明治期に調査されたからであろう。大正期には再び元の位置に分祀、再建され現在に至る。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。